

あうる

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 28

新天地を求めて広大な原始林に
挑む人々を翻弄したのは、
野生の動植物あふれる
北海道の自然そのものだった。

カラスの被害

明治二（一八六九）年、札幌の建設に乗り込んだ島義勇判官一行は、食糧となる米を小樽から札幌まで運んだが、そのとき大いに困ったのがカラスだった。

輸送した冬は食べ物乏しく、カラスはみな飢えている。そこに米を背負った二〇〇〜三〇〇人の人夫が通るのだからたまらない。カラスが幾千羽も群がって来て、ガアガア鳴きながら、米俵をついばんだ。

「北海道のカラスは内地に比べ大胆だ」と、人夫たちがあきれるほどの異常な体験だったという。

明治も二ケタに入る頃には開拓も進み、農耕地も増えたが、それに伴い鳥獣による被害も放置できなくなってきた。

中でも目立ったのが、このカラスの被害だった。大挙して移民の集落に群がり、浜では漁師が獲った魚を奪い、畑では農作物を次から次へと食い荒らした。

開拓使の根室支庁などでは、庁内にカラス銃なるものを備え付け、見つけ次第撃ち放ったが、そんなものではすまなかった。案山子も立てたが全然役に立たなかった。編笠をかぶせ、服を着せたり、徳利に目鼻を付けて立てたりしてより人間らしくしても、カラスは全く恐れず、逆にその上にフンをするような有様だった。

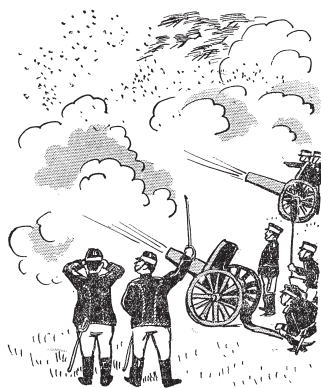
カラス撲滅作戦

手を焼いた役所が考え出したのが、明治十（一八七七）年三月から始めた、カラス

一羽四銭(約八〇〇円)の買い上げ作戦で、希望者には銃を持たせ、鑑札を与えてカラス退治を奨励した。

さらに翌年には、巢を探って卵を獲った者にも同額の手当を出すことにした。卵にまで範囲を広げ、徹底した撲滅作戦をとったのだ。

こうして明治十一年から十四年の約三年間だけで、カラスの捕殺数は五万五七〇〇羽、開拓使が出した奨励金が二二〇〇余円、獲った卵が二万一〇〇〇個、手当金は



バツタの進路を変えるため大砲を撃つ屯田兵
(北海道立図書館所蔵『北海道小学郷土読本・巻5』より転載)

八六〇円になったという。

だが、このカラス撲滅作戦は明治十四年で一時中止になった。

前年から十勝を皮切りに、日高・胆振・石狩などでトノサマバツタが大発生して甚大な被害を出し、これを退治するのにカラスが有効であることを知ったためである。

バツタは明治十七(一八八四)年までの五年間、繰り返し大発生して襲ってきた。開拓使が最も大がかりに行ったのが、一升三〜一五銭でバツタの成虫・幼虫・卵を買い上げることだった。明治十六年に駆除したバツタの数は、実に三六九億二九〇〇万匹にのぼったという。

この蝗害は、十七年夏の長雨でバツタの繁殖が抑えられ、大量死したことで終結した。

ヒグマとオオカミ

移民たちは、北海道固有のエゾヒグマと

収穫を奪うカラスやバツタ、
家畜や人を襲う野生動物たち。
開拓使は自然の猛威に、駆除
対象の買上げ制度で対抗した。



真駒内牧場におけるエドウィン・ダンと輸入馬(北海道大学附属図書館所蔵)

エゾオオカミにもしばしば悩まされた。

明治十一(一八七八)年一月には、札幌の丘珠で一軒の農家がヒグマに襲われ、主人と赤ん坊が殺され、妻が瀕死の重傷を負った。血に狂ったヒグマは再び同家にとつて返し、雇い人も殺したという。琴似の屯田兵が出動し、二日間の山狩りの末、やっとヒグマを仕留めることができた。

この凄惨な事件の発端は、猟師が巣穴で冬ごもりをしていたヒグマを撃ち損ねたことだった。逆襲されて猟師が死亡、逃げたヒグマの追跡の最中に起きた事件であった。ヒグマにとつても、寝ているところを襲われた上殺されるという、迷惑な話であった。

家畜はオオカミに狙われた。

お雇い外国人のエドウィン・ダンは、日高地方の新冠^{にやぶ}の牧場で馬の品種改良を行っていたが、明治十年頃には、オオカミを根絶やしにするか、あるいは新冠での馬の育成事業を打ち切るか、どちらかに決めなくてはならないほど、大きな被害を受けていた。

彼は毒物のストリキニーネを東京・横浜、さらにアメリカからも買い集め、それを鹿肉に混ぜた餌をまき、付近一帯のオオカミを一網打尽に毒殺した。

ヒグマとオオカミにも、明治十年には一頭二円(約四万円)の捕殺奨励金制度が発令されていたが、翌年にはヒグマは五円、オオカミは七円と大幅に値上げし、退治に力を注いでいる。それだけ被害が深刻だったのだ。

保護したために被害が

エゾシカはどうかといえば、開拓使が外貨獲得のためにもくるんだシカ革やシカ肉の輸出計画が乱獲を招いた。

さらに、明治十二年一月から二月にかけて全道的に大雪となり、積雪でササなどを食べられなくなったシカが大量に餓死し、数が激減した。

それ以来政府はエゾシカ保護に方針を転換し、乱獲を防いだ。

天敵だったエゾオオカミが害獣として駆除され絶滅したこともあり、生息数はどんどん増え、現在では被害をもたらし、農林業や生態系への悪影響の対策に迫られる結果となっていました。

あつろの杜

小説家・同人誌『季節』主宰
吉井よう子さん

Interview

大学の恩師で『北方文芸』編集者の故・小笠原克さんの書誌を出版した吉井よう子さん。1989年に道新文学賞を受賞し、同人誌『季節』を主宰する吉井さんのお話です。

滝上から札幌へ

道北の滝上町の農家に生まれ、中学三年の時に札幌に来ました。札幌南高に入学し、その後、藤女子大学へ進学しました。祖父が両親に「財産は残してもなくなるけれど、学問は身につけさせれば、その子の一生のものになるのだから、学問をさせなければいけないよ」と言って、私を札幌に出してくれました。

実家は滝上に入って私で三代目です。祖父も祖母も出身は岡山県で、祖父が一九〇九年、二八歳ぐらいの時に開拓団の団長で滝上にやって来ました。(編注：吉井さんの祖父は一九四七年に滝上町長に就任、のちに名誉町民となった岡本政道翁)

藤女子大学国文学科に

南高時代、当時の北海道新聞に藤女子大学の小笠原克先生がコラム「朝の食卓」を書かれていました。小笠原先生は、更科源蔵さんと一

緒に北海道文学館を創設した一人です。『北方文芸』の編集長もなされた方です。

藤にはもう一人、宇野親美という高名な先生がおられ、このお二人の「朝の食卓」がとっても楽しみで、もし藤に入ったら、お二人の授業を受けようと思っていました。宇野先生は私が大学四年の時に亡くなりましたが、どちらも素晴らしい先生でした。

恩師に導かれ 文学と歩む 人生に…



吉井よう子
よいし よこ

本名・岡本茂子。滝上町生まれ、藤女子大学国文学科卒。
1972年札幌市北区に喫茶店「のぼり窯」を開店。店内で小笠原克氏を中心に学生主体の「のぼり窯読書会」、研究者主体の「雑談会」、「北海道文学全集を読む会」等を開催。
1989年「伐り株」(『白雲木』第3号)で第23回北海道新聞文学賞受賞。1996年同人誌『季節』創刊。
著書に『オルガン物語』(工房マツモト)、『伐り株・水晶林 吉井よう子作品集』(構想社)、編書に『小樽運河保存の運動 歴史篇・資料篇』(共同編集、刊行会)、『久保栄小笠原克評論集』(新宿書房)、『小笠原克書誌』(小笠原克書誌刊行会)がある。



きっかけ

小説を書き始めたのは遅く、四〇歳位からです。その前まで文学の勉強を続けていましたが、小説を書いたことはありませんでした。

旭川に、評論家でのちに三浦綾子記念文学館の館長をなさった、高野斗志美先生がいらっしやった。この先生が小笠原先生と大の仲良しで、私も小笠原先生にくっついてよくお会いしていました。

高野先生は「愚神群」という全国的にも評価の高い同人誌を出されていたのですが、その先生に「うちの雑誌に小説書いてみない？」と誘われ、二年後ぐらいに

一編書きましたら、何と中央の雑誌に取り上げてもらい、びっくりしました。

道新文学賞を受賞したのは一九八九年です。三作目ぐらいの作品だったんじゃないでしょうか。

読書会

私は北大と藤女子大の中間で「のぼり窯」という喫茶店を開いていたんですが、七四年からそこで、学生を中心にした文学の読書会を始めました。そこに小笠原先生、北大の神谷忠孝先生が講師で来てくださった。小笠原先生は亡くなるまでずっと。

北大、藤、教育大、武蔵、大谷、医大などさまざまな大学の学生が集まり、何か大学のゼミのような感じでした。ほかに大学の先生、院生中心の研究會、小説を書いている女性たちの読書会など、色々な文学の集まりが持たれました。同人誌活動が盛んで日本全体、文学活動が活況を呈していましたね。

北海道文学館

北海道文学館との関わりは、正式には私がここに就職してからですが、大学を出てすぐの頃、アルバイトでお手伝いをしていました。文学館は小笠原先生と木原直彦さんが中心で、先頭に立っていました。

したが、当時は建物が無く、年に一〜二回、デパートなどを会場に展示会を行っていたんです。先生方だけでは手が足りないもので、その都度、学生を集めていました。小笠原先生って、非常にリーダーシップがあるんだけど、下働きも一生懸命なさるし、それでいてアジテーターでもあり、矢面にも立つといった、すごく魅力的な方で、男女問わず惹きつけてしまふ。だから先生の周りには常に人が集まっていましたね。

『季節』と『小笠原克書誌』

今年三月に第七号を発行した『季節』は、九六年に小笠原先生と相談して創刊した同人誌です。二〇年で七巻というペースですが、原稿が集まったら出版することにしています。この『季節』という書名は、「季節という言葉はとってもいい言葉だよ」と言って先生がつけて下さったのですが、残念ながらことに第三号で先生の追悼号になってしまいました。この『季節』に分割して発表してきた『小笠原克書誌』は、先生が亡くなられて一五年目ようやく出版することができました。今後はわが家の歴史のようなものを遺しておきたいな、と思っています。

句読点

「。」とか。「」の句読点を上手に使えるかどうかで、文章の読みやすさは大きく違ってきます。「おじいさんが楽しそうに川で洗濯をするおばあさんの姿を眺めていましたさてどちらが楽しんでいるのでしょうか」というような、句読点抜きの文章を見ると読む気がしないと思います。

ところが、あえて文章に句読点を入れない場合があります。年賀状や社長就任、定年退職の挨拶状、会社の創立記念パーティの招待状等々の葉書・手紙関係から、表彰状や卒業証書の類まで、句読点を一切使っていないものが結構あることに気がつきます。

なぜ挨拶状などに句読点を入れないのでしょうか？

読み手にとっては、句読点が入っている方が読みやすいに決まっています。にもかかわらず、句読点を入れないのは、そういった文章に句読点を入れると、相手に失礼にあたると考えられてきたからです。

もともと句読点は、漢文などの読みにくい文章に、読む人が自分なりに考えて「、」や「。」を入れて、読みやすくしていたものでした。ですから句読点を入れた手紙などを送ったりすると、「あんたの頭のレベルだと、こうして句読点を入れてあげないと読めないでしょう」と相手を馬鹿にすることになってしまふ、というわけです。

それで、今でもフォーマルな挨拶状の場合は、その伝統を守り、あえて句読点を入れないことになっているのです。

江戸時代まで文章に入れる習慣はなく、明治時代になって初めて政府が使い方を決めたこの句読点。文字の歴史から見ると、まだまだ新しい用法なのです。

FORMATION

金融を知りたいすべての人に

新・金融経済と証券投資
入門から使える標準理論まで
玉山和夫・著
定価3,000円＋税

金融教育が求められる時代に適した、金融の入門から応用、標準理論の基礎までを網羅した実用書。金融・経済や証券投資で耳にする用語や理論が、段階を追って分かりやすく学べます。

貨幣や銀行のなりたちといった金融の原点に始まり、投資理論、国際金融の歴史・背景を解説。難しく思えた新聞の経済・金融・株式面が読めるようになると、身近な生活との関わりが見えてきます。前作を大幅に加筆・再編集。



中西出版
A5判、371頁
2016年4月刊行

北辺から幕末・明治を読む

箱館戦争再考
若林滋・著
定価2,000円＋税

今から約150年前、蝦夷地と呼ばれた北海道で旧幕府脱走軍と政府軍が刃を交えた「箱館戦争」。歴史に残る戦いは、その土地にどのような痕を残したのでしょうか。戦場となった函館・松前にとっての箱館戦争とそれ以前、以後を、北海道人の視点で掘り起こします。

領主の松前藩は交易で栄えましたが、幕末には分領・移封を受け、戦火が襲い、その後も不遇が続きました。時代に翻弄された藩と民衆の姿が垣間見える作品です。



中西出版
四六判、324頁
2016年3月刊行

十勝発、食と健康のレシピ集

ワンプレートdeバランスごはん2
帯広大谷短期大学・編著
定価1,200円＋税

農業王国・十勝にある帯広大谷短期大学。その生活科学科栄養士課程で学ぶ学生たちが考えたワンプレートレシピが再び書籍化されました。今回は4つのテーマで豊かな食卓を提案しています。

生活段階に合わせた「ライフステージ」を中心に、「地産地消」「美活食」、連携を結ぶ香川短大からの「〈香川県〉特産品」と、約60種類のレシピを掲載。一品料理やデザートまで多彩な、アイデアあふれるバランスレシピ集です。



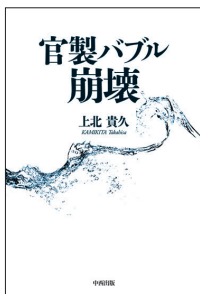
中西出版
A5変形判、96頁
2016年3月刊行

4度目のバブル崩壊を予告する

官製バブル崩壊
上北貴久・著
定価1,600円＋税

7年にわたり世界的株高が続く中、日本ではアベノミクスのもと、政府・日銀が大規模な財政出動やGPIF改革、金融緩和を繰り返しています。「官」が資金投下し景気を下支えるこの政策は、どのような結末となるのでしょうか。

近年3度のバブル崩壊過程をチャート分析し、現在の市況と比較。国際金融、政治の動向を読み解き、今後の経済と「官製バブル」崩壊が国民生活に及ぼす重大な影響を鋭く指摘します。



中西出版
四六判、249頁
2016年3月刊行

碑を訪ね、過去を見つめる

続アイヌモシリ・北海道の民衆史
人権回復を目指した碑を訪ねる
杉山四郎・著
定価1,300円＋税

アイヌモシリ・北海道の歴史を底辺で支えて来たのは、どういう人々（働き手）か。その答えを求め、道内各地に建立された碑を30数年にわたり訪ね歩いた記録の続編。前作刊行以後の5年半で判明、もしくは建立された碑の調査と、著者らが新十津川町に新たに碑を建立した経緯を収めています。

碑そのものやそこに記された文から見てくる、民衆自らが刻んだ歴史を探し続ける、異色の紀行です。



中西出版
A5判、146頁
2016年2月刊行

北海道米の原点がわかる絵本

赤毛米をそだてた久ぞうさん
坪田啓子・さく
斉藤はつめ・え
定価1,000円＋税（電子書籍版は300円＋税）

「さむい北海道で今ではお米がとれるよね。どうやって赤毛米を増やしたのかしら？」寒冷で米が育たないといわれた北海道で苦勞の末に稲作を成功させた中山久蔵。現在の北広島市であったおはなしを、久蔵が育てた赤毛米のキャラクター〈まいピー〉が紹介します。北海道の稲作がわかる、幼児から小学校低学年向けの絵本です。

昨年9月の電子書籍発売から約半年、待望の書籍化が実現しました。



アンビジャスプランSAZE（自費出版）
B5判横、16頁 2016年5月刊行
（問い合わせは011-373-3017まで）
※電子書籍の価格は希望小売価格

